

「中学生らしさ」とは

港区立青山中学校長 福井 正仁

平成 27 年度も「中学生を『大人』に！」のスローガンを掲げて、生徒の自立を促す指導を進めます。このスローガンには、中学校 3 年間で確実に生徒を「バランスのとれた大人」へのステップを上らせたいという思いと、第二次性徴を迎える時期にある中学生は、実は私たちが考えている以上に「大人」だということを再認識したいという思いが込められています。

1 生徒の自立を促す五つの指導目標

生徒の自立を促すための指導として、次の五つの目標を掲げて教育活動を進めます。

- (1) 「さわやかなあいさつが飛び交う温かい学校」をモットーにした学校づくり
さわやかなあいさつを心がけ、温かさを基盤としながらも、温かさに甘えることなく、生徒相互が尊重し合い、切磋琢磨する学校づくりを進める。
- (2) 「一人一人の生徒が見える教育」の推進
全職員が全生徒の生活・学習状況の把握に努め、一人一人の生徒が自らの力を最大限に伸ばし、適切な進路選択ができるよう指導する。
- (3) 生徒の主体的な行動を促す指導の推進
「指示待ち」、「横並び」の行動から脱却し、主体的に行動できる生徒の育成に努める。
- (4) 生徒による自主的、自治的、自発的な活動の推進
学級活動、生徒会活動、学校行事、部活動等において、生徒の自主的、自治的、自発的な活動の場面を計画的に設定する。その際、上級生にリーダーシップを発揮させ、人間関係を調整しながら、活動の充実を図るよう指導する。
- (5) 生徒の能動的参加を促す授業内容・方法・形態等の工夫
基礎的・基本的な知識や技能の習得は重要であるが、さらに、習得した知識や技能が活用できる機会を整備するなどの授業改善を進める。また、言語活動の充実に努め、生徒が自ら考え、その考えを発表する機会を設けるなどにより、授業への能動的な参加を促す。

2 「中学生らしさ」とは

毎年、1 年生が入学して考えることは、「中学生らしさ」です。社会が求める「中学生らしさ」は、「子どもらしさ」に包括されるように、小学生に求める子ども像と大きな差がないように思います。しかし、小学生までに積み重ねてきた豊富な体験を基に、大きくステップ・アップするのが中学生の時期です。改めて「中学生らしさ」について考え、どのような中学生を育成すべきかについて、社会、家庭、学校が共通の認識をもちたいと思います。

以下、「青中だより」平成 27 年 5 月号の抜粋です。

1 年生が入学して 1 か月がたちました。主体的に行動する 2・3 年生をモデルとして学校生活を送り、名実ともに「中学生らしく」なってきました。中学校が小学校と異なる点は、多くの教科を学級担任が担当する学級担任制から、各教科を専門の教員が担当する教科担任制になること、教科の学習事項が増え、授業のスピードが速くなること、思春期を迎え

る生徒を指導するため、規則に基づいたより厳しい生活指導により生徒の自覚を促すこと、部活動等の放課後や休日の活動が増えることなどが挙げられます。1年生は、これらの変化に戸惑いながらも、職員や上級生の支援により、一步一步中学校生活に慣れてきています。青山中学校のモットーである「さわやかなあいさつが飛び交う温かい学校」は、この支援の温かさにも表れています。

「中学生らしさ」は、色々なところに表れるものですが、それぞれが、バランスのとれた「大人」への大切な道のりです。家庭、地域、学校が協力して、生徒の大きな成長を見守り、支援していきたいと思えます。また、「小学生までは素直だったのに、中学生になると生意気になった」といった声もよく聞かれます。私はこの言葉を聞くたびに反論したくなります。思春期を迎える子どもたちは、「素直さ」がなくなるわけではありません。「素直さ」の質が変化するのです。幼少期は大人に言われたことをそのまま受け止め、言われた通り行動することが「素直さ」と受け止められます。しかし、思春期の子どもの「素直さ」は、大きく異なります。周りの人の指示や意見を自分なりに受け止め、ときには同意し、ときには反論もします。自らの考えや判断に基づいて反応するわけです。その考えや判断が独りよがりであったり、自分だけの視点であったりしたときは、もっと広い視野で考え、他の人の多様な考えをも包含できる考えに高めていけるよう助言しなければなりません。しかし、自らの考えをもてることの「素直さ」は、「大人」へのステップとして大切にしたいです。

3 変化の激しい時代を生きる原点

子どもたちは、これから先、ますます変化の激しい時代を生きていきます。10年・20年後には、現在の職業の半分近くが自動化等によりなくなってしまうとか、半数以上の人々が現在は存在しない職業に就くことになるとかといった予測もあります。どんなに機械化が進み、仕事の中味が変わっても、人と人とのつながりこそが、人間生活の原点だと思います。

以下、「青中だより」平成27年6月号の抜粋です。

集団生活を通して、多様な体験を重ね、「大人」へのステップ・アップを図るべき中学生には、表面だけの付き合いではなく、生涯の友となるような「心のつながり」を体験させたいと強く思います。日常の学校生活でも、つながりを意識した指導を進めますが、特に、移動教室等の宿泊行事では、回りの自然や地元の方々との出会いが、「心のつながり」づくりを後押ししてくれます。そして、30日（土）に開催した運動会も、体育的な活動を通してつながりを考える行事であると言えます。

本校の運動会の特色は、通常の学級と特別支援学級が合同で、生徒一人約10種目に出場し、全校の紅白に分かれての応援、吹奏楽部の演奏、係活動による生徒の主体的な運営と、生徒が自席にいる時間がほとんどないほど活動することです。また、保護者、地域の皆様に参加いただく競技が多く、生徒、保護者、地域が一体となった行事であることです。紅白の勝敗も、生徒種目の勝敗だけではなく、保護者・地域種目を加えた「青山杯」の勝敗も競います。当日は、約500名の皆様にご来校いただき、生徒を応援いただきました。今年は、生徒種目、「青山杯」とも白組が優勝しましたが、僅差の勝負が続き、白熱した場面がたくさんありました。応援合戦では、紅組が見事優勝しました。閉会式での生徒一人一人の達成感に満ちた表情から、運動会の練習、本番を通じた「心のつながり」を強く感じました。この感動を基に、生徒は、自らを鍛え、また、一層質の高い集団をつくっていく決意を新たにしてくれたものと考えます。